

附表 耐震診断の評価の結果と構造体力上主要な部分の地震に対する安全性の評価

- ①耐震診断結果のうち最小値のものを記載
- ② $I_{so}=0.6$, $Z \cdot G \cdot U=1.0$ とする。
- ③構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性の評価の分類

耐震診断の方法の名称		構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性		
		I	II	III
建築物の耐震診断及び耐震改修の実施について技術上の指針となるべき事項第1第二号に定める建築物の耐震診断の方法		$I_s < 0.3$ 又は $q < 0.5$	左右以外の場合	$0.6 \leq I_s$ かつ $1.0 \leq q$
「公立学校施設に係る大規模地震対策関係法令及び地震防災対策関係法令の運用細目」		$I_s < 0.3$ 又は $q < 0.5$	左右以外の場合	$0.6 \leq I_s$ かつ $1.0 \leq q$
一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄骨造建築物の耐震診断指針」(1996年版, 2011年版)		$I_s < 0.3$ 又は $q < 0.5$	左右以外の場合	$0.6 \leq I_s$ かつ $1.0 \leq q$
一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第1次診断法」により想定する地震動に対して所要の耐震性を確保していることを確認する方法		—	—	$1.0 \leq I_s/I_{so}$
一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄骨鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第1次診断法」により想定する地震動に対して所要の耐震性を確保していることを確認する方法		—	—	$1.0 \leq I_s/I_{so}$
一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」及び「第3次診断法」(1990年版)		$I_s/I_{so} < 0.5$ 又は $C_t \cdot S_d < 0.15$	左右以外の場合	$1.0 \leq I_s/I_{so}$ かつ $0.3 \leq C_t \cdot S_d$ ≤ 1.25
				$1.25 < C_t \cdot S_d$
一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」及び「第3次診断法」(2001年版)		$I_s/I_{so} < 0.5$ 又は $C_{TU} \cdot S_d < 0.15 \cdot Z \cdot G \cdot U$	左右以外の場合	$1.0 \leq I_s/I_{so}$ かつ $0.3 \cdot Z \cdot G \cdot U \leq C_{TU} \cdot S_d$
一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄骨鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」及び「第3次診断法」(1997年版)	鉄骨が充腹材の場合	$I_s/I_{so} < 0.5$ 又は $C_t \cdot S_d < 0.125 \cdot Z \cdot G \cdot U$	左右以外の場合	$1.0 \leq I_s/I_{so}$ かつ $0.25 \cdot Z \cdot G \cdot U \leq C_t \cdot S_d$
	鉄骨が非充腹材の場合	$I_s/I_{so} < 0.5$ 又は $C_t \cdot S_d < 0.14 \cdot Z \cdot G \cdot U$	左右以外の場合	$1.0 \leq I_s/I_{so}$ かつ $0.28 \cdot Z \cdot G \cdot U \leq C_t \cdot S_d$
一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄骨鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」及び「第3次診断法」(2009年版)	鉄骨が充腹材の場合	$I_s/I_{so} < 0.5$ 又は $C_{TU} \cdot S_d < 0.125 \cdot Z \cdot R_t \cdot G \cdot U$	左右以外の場合	$1.0 \leq I_s/I_{so}$ かつ $0.25 \cdot Z \cdot R_t \cdot G \cdot U \leq C_{TU} \cdot S_d$
	鉄骨が非充腹材の場合	$I_s/I_{so} < 0.5$ 又は $C_{TU} \cdot S_d < 0.14 \cdot Z \cdot R_t \cdot G \cdot U$	左右以外の場合	$1.0 \leq I_s/I_{so}$ かつ $0.28 \cdot Z \cdot R_t \cdot G \cdot U \leq C_{TU} \cdot S_d$

耐震診断の方法の名称	構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性		
	I	II	III
一般財団法人建築保全センターによる「官庁施設の総合耐震診断基準」	$Q_u / \alpha \cdot Q_{un} < 0.5$	$0.5 \leq Q_u / \alpha \cdot Q_{un} < 1.0$	$1.0 \leq Q_u / \alpha \cdot Q_{un}$ かつ $GIs < 1.0$
			$1.0 \leq GIs$
一般財団法人日本建築防災協会による「既存壁式プレキャスト鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断指針」に定める「第2次診断法」	—	—	$1.0 \leq Is / Iso$

I 大規模の地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険が高い。

II 大規模の地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険がある。

III 大規模の地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険が低い。

震度6強から7に達する程度の大規模の地震に対する安全性を示すもので、いずれの区分に該当する場合であっても、違法に建築されたものや劣化が放置されたものでない限りは、震度5強程度の中規模地震に対しては損傷が生ずるおそれは少なく、倒壊するおそれはないものとされています。

用語の説明

記号	名称	説明
IS	・ 構造耐震指標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 建築物の耐震性能を表す指標、この値が大きいほど耐震性能が高くなる。 ・ 構造図面やコンクリート強度試験結果等をもとに建築物が保有する「強度」と「粘り強さ」、「建築形状」、「経年劣化」を評価して、構造計算により算定する。
ISO	・ 構造耐震判定指標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 建築物の耐震性能の有無を判定する指標 ・ 第2次診断用、第3次診断用の基準値は、$ISO=0.6$ ($Z \cdot G \cdot U=1.0$の場合)
CT (CTU) ・ Sd	<ul style="list-style-type: none"> ・ 累積強度指標 (CT) ・ 構造物の終局限界における累積強度指標 (CTU) ・ 形状指標 (Sd) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 建築物に一定の「強度」を確保するための指標、この数値が大きいほど耐震性能が高くなる。 ・ 建築物の「粘り強さ」を過剰に評価すると危険性が大きくなるため、それを防止するために一定の「強度」を確保する。
$Z \cdot Rt \cdot G \cdot U$	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域指標 (Z) ・ 地盤指標 (G) ・ 建物の振動特性を表す指標 (Rt) ・ 用途指標 (U) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各指標により建築物の必要とされる耐震性能を表す。
q	・ 保有水平耐力に係る指標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 建築物の耐震性能を表す指標。この数値が大きいほど耐震性能が高くなる。